

精神保健福祉だより にいがた

No. 127

新潟県精神保健福祉センター

〒950-0994 新潟市中央区上所2-2-3
新潟ユニゾンプラザハート館

TEL : 025-280-0111 (代)

FAX : 025-280-0112

E-mail : ngt043040@pref.niigata.lg.jp

ホームページアドレス :

<http://www.pref.niigata.lg.jp/seishin/1219773657991.html>

2012.11.12 発行

巻頭言

精神保健福祉東北大会に参加して

新潟県精神保健福祉センター 所長 阿部 俊幸

さる10月4日、福島県会津若松市文化センターで開催された精神保健福祉東北大会に参加しました。恒例の大会式典後の特別講演では「放射線と健康リスク」と題し福島県立医大放射線健康管理学講座の大津留晶教授の御講演をうかがいました。その後のシンポジウムでは東北大震災における被災三県の医療機関、県教育委員会、町教育委員会からシンポジストとして「震災からの復興と子供の心」をテーマに発言があり、その後フロアやコーディネーター、指定討論者との意見交換とまとめがなされました。震災後一年半を経過し除染も進んで放射線量は低減しつつあるものの、大津留先生も言われた「情緒的・情動的に認知される放射線リスク」も含めまだまだ被災者のご苦労は多いと感じました。大会終了後、会場を出て鶴が城周辺を散策すると来年の大河ドラマ八重の桜ののぼり旗、ポスター等が多く飾られています。その主人公新島八重も籠城戦に従軍した戊申戦役では、白虎隊の悲劇に象徴されるように会津藩の死傷者は多数にのぼりました。本州最北端の斗南藩への移住後も心の傷を抱えたままの方も多かったことでしょう。震災と戦災、その様子は大きく異なるもののあらためて先人の苦労に思いをはせ、現代の福島のみなさんに平穏な日々が一日も早く訪れることを祈りつつ秋の会津路を後にしました。

目次

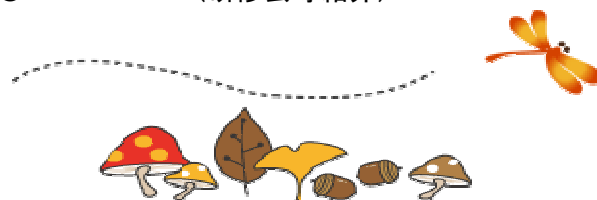
●巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

●特集1 新潟県の自殺対策
～いのちとこころの支援センターの開設～・・・・・・ 2

●特集2 高次脳機能障害相談支援について
高次脳機能障害者の就労支援に関する雑考・・・・・・ 3
「家族のつどい」と「家族教室」実施報告・・・・・・ 4

●脳外傷友の会「スワン」10周年記念・・・・・・ 5, 6

●INFORMATION (研修会等紹介)・・・・・・ 6



特集 1 新潟県の自殺対策～いのちとこころの支援センターの開設～

新潟県いのちとこころの支援センター

～自殺予防・自殺対策専門の相談窓口です～

新潟県では、自殺未遂者など自殺ハイリスク者及びその家族等に対する相談支援を強化するため、平成 24 年 8 月 23 日（木）、「いのちとこころの支援センター」を県内 3 か所の地域振興局健康福祉環境部（保健所）に開設しました。

保健師、精神保健福祉士、社会福祉士等の資格を有する専門相談員が、ご依頼により、ご自宅や病院など地域に直接出向き、本人及びその家族等のこころのケア相談を行い、地域における支援体制構築に向けた関係機関との調整を行います。

相談

こころの悩みを抱える本人や、自殺のサインに気づいた家族等への支援（来所及びご自宅や病院など関係機関に直接出向き、相談支援を行います。）



地域連携

アウトリーチによる関係者とのネットワークづくり（関係機関と連携して支援を行います。）

ご相談は、下記の各センターにご連絡ください。

◆場所	電話番号	住所
下越地域	0254-28-8880	〒957-8511 新発田市豊町3-3-2 (新発田地域振興局健康福祉環境部内)
中越地域	0258-88-0070	〒940-0861 長岡市川崎町2711-1 (長岡地域振興局健康福祉環境部内)
上越地域	025-524-7700	〒943-0807 上越市春日山町3-8-34 (上越地域振興局健康福祉環境部内)

◆開設日 月～金曜日（休日、祝日、年末年始除く）

◆開設時間 午前8時30分から午後5時15分まで

高次脳機能障害者の就労支援に関する雑考

高次脳機能障害相談支援センター

相談支援コーディネーター 山崎 節子



当センターにおいても就労に関する相談を受けることは多い。それらを総じると「働きたい」という思いと「働けない」という現実が浮き立ってくるように思う。就労場面に至って高次脳機能障害の見えない部分が本人にも自覚されるようである。

高次脳機能障害者に対する就労支援は平成10年より障害者職業総合センターで研究が始まり、当初は休職者の職場復帰の促進と離職の防止、雇用の安定に資することを目的としていた。以後、研究が進められ、平成21年の『高次脳機能障害者の就業を可能とする研究』では支援終了者の追跡調査より、「〈当事者の努力〉、〈事業所の取り組み〉、〈専門家の支援〉という三者の連携によって高次脳機能障害に関わる職場適応・定着の問題は解決可能である」と結論づけられている。現在はこれらの成果をもとに求職者にもその窓口が開かれ、障害者職業センターはもとより、障害者・就業生活支援センターや一般の障害者福祉サービス事業所でもその支援が行われている。

このような実体験と予備知識を持ちながら11月6日に三条市で開催された「'12にいがた就労支援セミナー」(主催:社会福祉法人県央福祉会)に参加した。180名余りが参加した今年度のテーマは「より働き続けるために」であった。

冒頭、新潟労働局から平成23年度の県内ハローワークにおける障害種別の職業紹介状況について、新規求職者・就職件数ともに前年度から増加し、特に就職件数では初めて1,000件を超え、過去最高を更新したことが伝えられた。統計上では高次脳機能障害者は発達障害や難病と同じ《その他の障害者》として括られ、3件の新規求職申し込みがあった。なお、このカテ

ゴリー全体では76件で、発達障害の診断件数の増加に伴い、今後さらに増加が見込まれており、新たな障害特性に応じた支援が必要とされている。続いて就労支援事業所や企業の取り組みについての発表があり、ジョブコーチの更なる養成と普及の必要性と教育機関との連携の重要性が指摘された。そして、最後に「連携を考える」をテーマとしたグループワークが行われた。ここでは先に述べた当事者、事業所、支援者の三者のそれぞれが当事者の「働きたい」という気持ちを汲みながら支援にあたっている実際に触れることができた。

翻って障害特性からいえば、高次脳機能障害は脳の外傷に起因する中途障害であり、身体面の機能障害を伴うことも多い。この場合にはまず身体障害への理解が求められ、次いで認知機能の低下をはじめとする高次脳機能障害への理解を求めるという2段階の支援プロセスが必要になる。また、支援に際しては当事者の障害への向き合い方や受容の程度も至極影響してくる。それらは「以前のように働けないが、それでも働いていく」という姿勢が醸成されるのを待つという息の長い時間でもある。その意味で、今回のセミナーでは「自他の障害受容の困難さへの理解」という視点が見られなかったことが気になった。真の意味での共生社会を志向するのであれば、単純な数の増加のみで測るのではなく、時間と手間を要する者も含めた就労支援が望まれる。高次脳機能障害者の就労支援はそのことの重要性を教えてくれる最たるものである。困難さも承知の上で雇用の機会を設ける事業所の懐の深さとそれらを涵養していく支援者のさらなる飛躍に期待したい。もちろん当センターもその一助を担えればと思う。

平成24年度高次脳機能障害「家族のつどい」と「家族教室」実施状況

高次脳機能障害者のご家族に対し、障害についての理解を深め、負担感・孤独感の軽減とエンパワメントを図ることを目的に、脳外傷友の会「スワン」との共催で精神保健福祉センターと長岡地域振興局で「家族のつどい」を実施しました。また、魚沼・南魚沼・十日町地域振興局との共催で「家族教室」を開催しました。

長岡地域振興局と魚沼地域振興局から、家族のつどいと家族教室についてそれぞれ報告いたします。



「家族のつどい」実施報告

長岡地域振興局健康福祉環境部

主査 清水桂子

高次脳機能障害は、外見からはわかりにくい障害のため、周囲からの理解が得られにくい障害です。このため、当事者はもとよりご家族は戸惑ったり、様々な不安を持つなど共通の悩みを抱えています。長岡地域振興局健康福祉環境部では、年4回1時間30分という短い時間ではありますが、ご家族で日頃の悩みや苦勞を語り合える場があったらという思いで「家族のつどい」を開催しています。ご家族と一緒に当事者が参加されたこともありました。他のご家族の対応を聞いて参考にしたり、「うちもそうだった」と励まし合ったりしています。時に、笑顔でうれしい体験を語り合うこともあります。

参加されたご家族には毎回アンケートをお願いしています。その中から、ご家族の声を紹介させていただきます。

- ・他の家族の話聞いてよかった。
- ・参考になることが聞けた。
- ・精神科病院の看護師や医師にも高次脳機能障害のことを勉強していただきたい。
- ・高次脳機能障害を理解してくれる人が周りになれば当事者は何かと過ごしやすと思うので、多くの人に障害を知ってほしい。
- ・高次脳機能障害の人たちを理解してくれる作業所やグループホームができてくれればよいと思う。

「家族のつどい」の中では、ご家族の切実な声を聞くことができます。ご家族が必要としている制度や支援をお聞きする機会にもなっています。

「家族のつどい」を通して、当事者を支えることも必要ですが、ご家族にも同じくらい支えを必要としていることを実感します。この「家族のつどい」での時間が障害への理解を深め、ご家族の孤立感の解消やストレスの軽減につながればよいなと思っています。



「家族教室」実施報告

魚沼地域振興局健康福祉部

精神保健福祉相談員 佐藤恵子

昨年度、長岡会場で実施された高次脳機能障害者の家族教室が、今年度は、南魚沼市を会場に実施されました。8月から10月の間に4回実施され、当事者の妻や母といった立場の4名の家族の方から参加していただきました。

今年度の家族教室は、高次脳機能障害の専門外来をもつ南魚沼市立ゆきぐに大和病院・地域連携室の手島先生や、同じような境遇をもつご家族、障害者相談支援事業所、ハローワークの方などを講師としてお招きし、高次脳機能障害の主な症状や対応、利用できる制度や社会資源についての講義・意見交換が行われました。

脳外傷友の会スワンから2名の方をお招きした際には、妻や母として日々、高次脳機能障害者を支えている家族から話される体験談に、参加者も同じ立場から自身の体験を思い起こすことができたのか、意見交換などが活発に行われ、こういう場が高次脳機能障害者の家族には必要なのだな、と感じられた回となりました。

家族教室に参加されたご家族は、ほかの家族がどのようにして過ごしているか、障害について理解したいといった理由から参加申し込みをされていましたが、参加後の感想としては、「苦しいと感じているのは自分だけではないと分かった」、「障害について理解できた分、この先の大変さを感じた」、「自分と同じような境遇にある人ともっと話したいと思った」、といった意見を述べられました。

教室の運営を通して、高次脳機能障害者のご家族が求めているものが、ご本人への支援・対応について知りたいというだけでなく、家族の抱える思いを同じ境遇をもつ家族と話し合える場所がほしいというところにもあると感じられたので、来年度以降、どのようにその要望を実現していくかを考えていく必要があると感じました。

脳外傷友の会「スワン」設立10周年記念

高次脳機能障害者家族会である脳外傷友の会「スワン」は、平成14年に設立され、今年10周年を迎えました。

10周年を記念して、「スワン」会長の石井祐子さんと、高次脳機能障害者のご家族のお言葉を掲載します。

～10周年を迎えて～ 脳外傷友の会「スワン」会長 石井祐子

脳外傷友の会「スワン」が発足して2か月後、夫はバイクで自損事故を起こし高次脳機能障害者になってしまいました。スワンとの10年はいわば、私と夫との10年です。

平成16年に会長職を引き継いだ当時は、自宅が事務局。24時間体制の相談窓口でした。相談を受けても大した情報をお伝えできず、ひたすら辛い現状のお話を聞くことしかできませんでした。自分の無力さに苛立ち、夫には日々振り回され、子供たちにあたってしまう始末。無償で活動しているとはいえ、趣味の会のように気楽なものではないわけで、「あれもしなければ!」「これもしなければ!」と気持ちばかり焦ってかけずり回っていたように記憶しています。

平成19年高次脳機能障害支援普及事業が始まってやっと県は動き出しました。その後も「家族教室」「親の集い」「配偶者の集い」と脆弱な家族会に代わって、県が開催してくれるようになりました。

現在は、高次脳機能障害支援センターが新潟県精神保健福祉センターに設置され、支援コーディネーターも非常勤ではありますが、配置されています。

「新潟の支援体制」は、正直まだまだ変わらなければならないところだらけであるとは思いますが。しかし、この10年で国の施策と言えども行政が動きだしたのは大きいです。

福祉や医療機関とも講演会や当事者をとおして繋がりが出来てき、現場は対応に困っていると手を上げ始めました。

平成14年のスワン立ち上げ時はわずか5家族でした。そこから小さな声上がり、少しずつ変化して10年の時を経て今があります。

他県と比べると、心もとなくいつそ引越してしまおうかと思われる方もいらっしゃるようですが、自分たちの為だけではなく、これから発症して困るであろう方々の為に、私たちは活動しなければならぬと思います。

「新潟だって変わる。皆で変えましょう。」

「冬来たりなば」

Iさん(当事者の妻)

正月休み明け、仕事をしている私に夫から電話が入ったのは、お昼頃でした。

少しゆっくりの呂律のまわらない「目眩がする。」という声を聞き普通ではないものを感じた時の不安な気持ちは今でも忘れることが出来ません。

救急車で運ばれ病院についてから意識が無くなり、大きないびきをかいている夫の横で「今夜が山です。意識が戻ったとしても障がいが残るかもしれない。」と言う先生の言葉を聞いた時は頭の

中が真っ白になってしまったのを覚えています。

あれから二年が過ぎようとしています。その当時は以前とは全く変わってしまった夫を前にして、どう接していいかわからず途方にくれた時も、泣いてしまった時もありました。

自分が変わってしまったことに、一番大変な思いをしていたのは当事者である夫だったのに、そんなことを考える余裕すらなく、自分の事ばかり考えていた様な気がします。

今はデイサービスでお世話になっているAさんとの出会い、そしてスワンの石井さんとの出会い

又、様々な方々との出会いのおかげで、ここまで歩いてこれたと思っています。

以前は山に登ることが大好きだった夫でした。二人で一緒に登った時は、私のリュックを持って「ガンバレ!」とはげましてもくれた夫でした。「山に登りたい。」と言う夫に「元気になったらね。」

といつも言い訳の様に言っていた私でしたが、この頃は「春になったら登ってみようか。」と言える様になってきました。

「冬来たりなば、春遠からじ」
そんな言葉をふと思い出し、春に向って歩みを進めていきたいと思っている今日この頃です。



「生まれ変わった息子とともに」

Kさん(当事者の母)

平成12年4月30日午後6時15分。この一瞬が1秒でもずれていたら、27歳になった息子は、どんな人生を生きているだろうか？家族も、今どんな風に暮らしているだろうか？あの一瞬を境に、やんちゃでひょうきんでお調子者で何よりスポーツ大好きだった15歳の息子は居なくなってしまい、家族の生活も一変してしまいました。

もう少し時がたてば・・・20歳の頃には・・・10年経てば・・・そんな希望もことごとく打ち砕かれながら12年が過ぎていました。『何でこんなことになってしまったのだろう、これから何をしていけば、どこへ行けばいいのだろう』迷いながらの毎日の中、お世話になることになった更生指導所。そこでの指導員さんとの出会いや他の入所者さんとの出会いは、その後の私達の大きな心の支えとなってくれました。そして、スワンの会を知るこ

とになったのも、指導員さんの勧めからでした。これまでお世話になってきた数々の病院、施設、スワン家族会。そこにはいつも、暖かく優しく親身になって話を聞き励ましてくれる人がたくさんいました。15歳で生まれ変わった息子があるがまま受け入れ、笑いのある生活を取り戻せたのは、いい人たちにめぐり逢うことが出来たお陰だと心から思います。あの一瞬から12年経った今、目の前にいる息子は「10年経ったら・・・」と私が思い描いていた姿とはまったく違うけれども、これからの10年はもっと違う姿になっているかもしれない。そんな希望を少しでも持てるのは、周囲の人たちの「大丈夫」の言葉があるから、10年後の夢を語り合える家族会の仲間がいるから。

10年後の息子の笑顔を思い描きながら、これから何をすればいいのか考えて、今出来ることを精一杯することが親の使命だと思います。

皆様これからもたくさん力をください。



INFORMATION

研修会等のご案内

今年度後半に予定している研修会等をご案内します。詳細は今後、関係機関にお知らせします。

新潟県精神医療・保健・福祉関係者合同実践セミナー

テーマ「青年期以降の広汎性発達障害の支援を考える」

期日：平成25年2月22日（金）

会場：新潟ユニゾンプラザ

【基調講演】

講師：京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻教授 十一元三氏

演題：(仮)「青年期以降の広汎性発達障害について～どのように理解し、支援するのか～」

【シンポジウム】

座長：新潟大学医歯学総合病院精神科講師 遠藤太郎氏
対象：医療機関・市町村・保健所職員等

高次脳機能障害支援フォーラム

期日：平成25年3月9日（土）

会場：上越市民プラザ

講師：国立成育医療センターリハビリテーション科医長 橋本圭司氏

対象：一般県民、医療・保健・福祉関係機関職員

